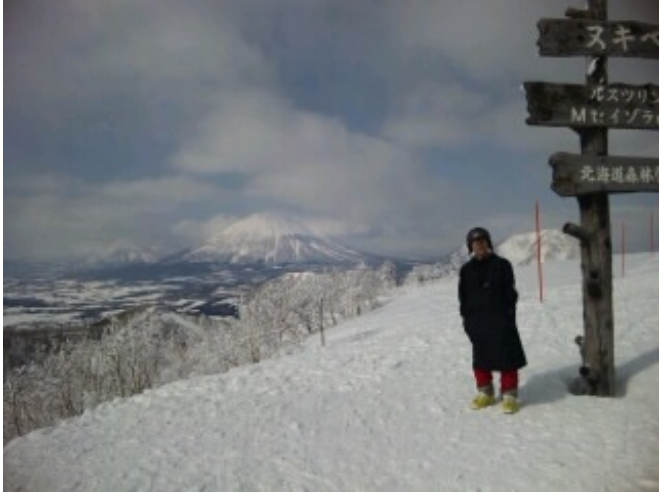

宮古島の日々（２）

４月２９日

目が覚めてみると腹が刺すように痛む。食あたりのようだ。トイレットペーパーをザックから取り出して、それを持ってテントから出た。すでに明るくなっていたが、博士も助手もまだ寝ているようだった。この地に来て初めて一滴も雨の降らない夜が明けた。ぼくは水辺で用を済ませると、昨夜の宴の場に行ってみた。犬が「きれいなビーチ」の方にそそくさと歩いて行っている。見ると、そこに残したままにしておいたそう麺が袋からはみ出て湿気で柔らかくなって曲がっていた。ビニール袋を見るとその中に入れておいた朝食用のパンが見あたらなかった。空になった泡盛の瓶が転がっている。先ほどの犬がここで早めの朝食を済ませたにちがいなかった。ぼくはテントに引き返し、横になった。

それから数回テントから出て排便したがいっこうにおさまりそうでなかった。ときに唸されるほどの痛みが襲ってきたので赤痢に罹ったかなと不安になった。腹痛は周期的に襲ってきた。３・４回目毎に便意をもよおした。テントの中で横になっていると、朝の太陽光線がテント越しに眩しい。ぼくはアイマスクをして目を刺激から守った。しかし、テント内は温室のように蒸してきた。身体中から汗が滲み出てきた。そして、腹がひとしきり騒ぎ、またぼくはテントから出る。このような事を繰り返しているうちに、体力を消耗し、脱水状態になってきて、少し歩くことでさえつらくなってきた。

やがて、博士と助手の声が聞こえてきた。朝食用のパンが紛失し、出しっぱなしにしておいたそう麺も駄目になったと言う。ぼくはテントから顔を出して、パンは野犬が食べたのだろう、と言った。それだけでくたびれて、また横になる。

その朝、米と生卵と調味料に毛が生えたようなおかずしか残っていなかった。博士らはぼくのテントのすぐそばの防波堤の下の日陰の中で朝食のための作業を始めていた。ぼくはテントから出て、腹の調子の悪いことを報告し、それでも米を研ぐことと、米の入ったコッヘルを火に架けることまでして、再びテントに戻って横になった。とてつもない重労働をしたあとのようにへとへとになっていた。食欲は全く無かったが、水が欲しかった。しかし、体力と気力を回復するためには、とにかく固形食料を胃に送り込まなければならなかった。

きょうはしかしこのまま動けないかもしれないと思った。ここで腹痛がおさまるまで横になって待つしかないかもしれない。赤痢だったら病院に行かねばなるまい。心細い時間が過ぎてゆく。しかし幸いなことに腹痛がおさまる兆候がみえてきた。やがて、ご飯が炊けたというので、テントから出て防波堤の影に入って生卵と醤油をご飯にかけて食べた。湯も飲んだ。三人は質素な朝食を済ませた。そこの日陰が次第に面積を縮めてきて居心地が悪くなってきたので、ぼくは再び

テントの中で横になった。ご飯を食べたせいか元気も回復してきていた。自分でも不思議なくらい調子が戻ってきたので、再び外に出てそのことを報告し、ついでに泳ぐつもりになってきたとも言った。この豹変ぶりには自分でも驚いた。この浜にはきっとたくさんの熱帯魚がいるにちがいないという確信があった。それにせっかくこんなすばらしい海辺を前にして、一泳ぎもしないで去るのではあとあと悔いが残るに違いなかった。

着替えて水中眼鏡をかけるとぼくは海中に身を投じた。どこまでいっても足がとどくほどの浅さだ。遠浅というよりはここは海全体が浅いのだ。６～７０メートル沖に行って初めて背が届かなくなるくらいだった。熱帯魚を見つけるための必須要件は岩である。熱帯魚は穴のあいた岩に巣くうので、これがない所では見つからない。そこでぼくは岩場を探した。底が黒みがかっているところが岩場だ。そちらに泳いでゆくと、気持ち悪い黒いナマコがいくつも岩にへばりついている。よくこんなものを自分はおいしいと思って食べていたものだ。

やがて、酒場の入口で客の呼び込みをしているきれいに着飾ったホステスを思わせるような長く垂れるヒレを持ち派手な色彩をした熱帯魚が、大きな珊瑚の岩影からのぞいてぼくの目を捕らえた。ぼくはそちらに泳いで行った。そして、海面から顔を出すと、すでに水着に着替えて泳ぎ始めていた川上博士をも呼び寄せた。「博士、いいところを見つけましたよ、一杯やってゆきましょう。」という感じだ。ぼくが近づくとその熱帯魚は尾ヒレを振りながらぼくを誘うように岩の反対側に泳いでゆく。反対側には穴がありその中に入っていった。ぼくがあきらめて去ろうとすると、また出てきた。ぼくがまたそっちへ行くと、また、中に入る。こういうことを二三回繰り返しているうちに博士がやって来た。ぼくはその魚を指さして、それは博士にまかせて、こんどはその岩の下のほうに潜っていってみた。すると、岩の底に穴がありその奥のほうから美しい青色の足をたくさん持った地を這う種類の魚がのぞいていた。この複数の足というのは胸ビレが進化したものだ。博士をまた呼んだ。ぼくが手を伸ばしてその奇妙な魚を指し示すと、それは穴に退歩した。博士は、それは毒を持っていて刺すので手を出さないほうがいいと言った。博士はまた名前を教えてくれたが、例によってぼくはすぐに忘れてしまった。しばらくして石塚君も水着をつけて泳ぎ始めた。しかし彼はなかなかこちらに来ないで、浅い砂地のところばかりをうろうろしていた。ようやく熱帯魚のいるこちらの岩場に来たころにはぼくらはもう飽きてきていて岸に戻り始めていた。

彼は海の経験が浅いからまだあまり深みに来ないほうが安全であることは確かだ。しかし、艶やかな魚は危険な深みに来ないと見れないのだ。彼は恐る恐るぼくらがいたところに泳いで行った。彼はしばらくそこで潜っていた。彼もあの派手な熱帯魚を見つけたに違いなかった。しかし彼はあまり深くは潜らない。必ず身体の一部が水面の上にあった。いいぞ、その調子だ、助手君。どんなに艶やかに着飾り誘惑にたけたものも、またどんなに美しい足を持ったものも、君が高見の見物をきめつける限りは害を及ぼすことはできないのだ。美しいものは離れて鑑賞できればそれで十分ではないか。しかし、自らの技を過信した何と多くの若者たちが美しきものに触れよう

と深追いをしその美しき毒牙に刺されてきたことか。生命体における美しさはすべて毒素の結晶だ。美しき人を目の前にしてわれわれが動揺し、たじろいでしまうのは故の無いことではないのだ。ぼくはこの旅行ののちある美しき歌姫と話す機会があり、彼女はその頃放映された日本のビジネスマンの実態を扱ったテレビ番組に言及して、われわれビジネスマンは毎日命をすり減らす思いでお客さんの接待をしなければならず「大変ですね」と憐憫の思いを表してくれた。そこでぼくはすかさず、「でも、あなたのような美しい方を接待できるのでしたら命がすり減ってもいいのですが」と言うと、彼女もすかさず「私を接待するのは命がけですよ、命がいくつあっても足りませんよ」と笑った。まじめな話の中よりもこのような冗談の裏に真理が潜んでいることが多い。

ぼくらはその日の目的地を伊良部島と決めた。そこで宮古島を横断して平良港に向かった。ぼくは腹痛はおさまったが、下痢が止まったわけではなく、その後二三日間のトイレットペーパーの消費量は、普段のときの約一か月分に相当するくらいだった。とにかくぼくは体力が低下していたので、博士が常に先頭でぼくと助手が後ろから博士の姿を見失わないようについてゆく、というパターンが定常となった。

平良港に向かう途中で、ぼくの全く予期していなかったことが待ち受けていた。決してパンクしないだろうと信じていたぼくのマウンテンバイクの後ろタイヤがパンクしたのだ。ぼくは、このマウンテンバイクを買ってからツアーに出るときはいつもスペアチューブを持参していたが、ずっとパンクすることはなかったので、とうとうマウンテンバイクは空気さえ十分入れておけばパンクしないものと合点するようになり、ついに今回は荷を軽くするためにスペアチューブは持参していなかった。石塚君は自転車を止めたぼくを追い抜くとそのまま進んでいった。ぼくは、パンク修理具を取り出して本当に久しぶりのパンク修理を始めた。パンクの穴を見つけるためにチューブにウォータボトルの水をかけてみた。容赦なく太陽光線が照りつけ、アスファルトを濡らした水もまたたくまに蒸発してしまう。やがてパンクは修理できたが、虫ゴムが古くなっていて空気がなかなかチューブに入っていかない。そのうち疲労して空気ポンプを押す手に力が入らなくなってきた。そうしているうちにやっと博士たちが引き返してきた。結局、ぼくはしばらく心もとない状態のタイヤのまま１キロくらい走ってガソリンスタンドでエアコンプレッサーのお世話になった。

ぼくらはそのまま平良港に向かい、伊良部島行きの切符を買った。自転車乗船代も安くなかった。出航まで１５分待ち時間があったので、ぼくはひとり市街に引き返し薬局を探した。歯が痛みだしていたので歯と歯の間を磨くブラシを買うためだった。宮古島に来てから２日目に買ったパイナップル味の砂糖塊（子供の頃よくしゃぶっていたものだ）を、走行中のカロリー源として頻繁にかじっていたのだが、これが歯をむしばみはじめていたらしい。結局目当ての物はなかったので、デンタル・フロスを買った。ついでにぼくはセブンイレブンに寄って船の中で食べるためににぎり寿司のプラスチックパック入り詰め合わせとミニバナナと青リンゴジュースを買った。

船の出航３・４分前に港に帰ってきたが、博士と助手がいなくなったぼくを探しており、ぼくを見つけると、船がもうすぐ出るぞと急がせた。確かに船は今にも出航しそうな様子だったのであわてて自転車を積んだ。客室に入ると、前後２室に別れており、前のほうが禁煙室だったのでぼくと石塚君はそちらに入って座った。愛煙家の博士は後ろの部屋に行った。船室の前の方にテレビがあり広島ー横浜大洋戦を実況放送していた。船内テレビの常として映りは悪かった。東京から去ってはるばる沖縄の離島に来て、その離島のまた離島に渡ろうとする時、ぼくは船上でその存在すら忘れかけていたプロ野球の試合をリアルタイムで見る。そして、ぼくがかぶっているレッヅのヘルメットが、ブラウン管に映し出される広島カープの選手たちのかぶるヘルメットと同じであることは一目瞭然だ。

ぼくは、もう何年も前から、つまらないから広島カープのファンであることをやめようと努力してきた。そして年々それは成功してきていたかに思えた。ぼくがかぶるヘルメットも、「カープのヘルメットだ」と言う人には、「レッヅのです」とはっきり断った。そしてそれはアメリカで買ったのだから嘘ではなかった。さて自分がカープのファンであることがつまらないというのはこうだ。ぼくは広島県で生まれ育ったので自然とカープファンになった。つまりカープは地元のチームだからいい、という単純な理由だ。さて、地元を愛する心理は、対象を広げてゆくと愛国心となり、狭めてゆけば父母への愛情にゆきつく。自分が属しているものあるいは自分を生んだものが優れているならば自分も優れているはずである、という心情だ。この「自分の地元が他より優れており、優れたものが優れたものを生み出す」という仮定が正しければ、自分の属しているものに同じく属している者たちはみな優れているはずだということになる。従って彼らが他と競うとき、彼らは勝つはずであり、さもないと上記仮定が覆される。そこで地元の者をひいきし応援することになる。つまり地元を愛することは自分を愛する自己愛の一形態である。自分個人に誇るべき何ものをも持たない者も、自分のルーツを誇ることは可能だ。またそういう人ほど、それが自分をさらに低めるのも気づかず、自分のルーツを頼りに自己を誇張したがる。すなわちこういう人が自己を他人にアピールしようとするとき、自己との関わりのあるもので優れたものを吹聴する。従って、自分は・・・だというのでなく、自分の何々は・・・なのだというパターンで話すのだ。すなわち彼らはたいてい次のような言い方をする：自分の祖父は・・・だった、親父は・・・だ、母の実家は・・・だ、いとこに・・・をしているのがいる、俺の高校の同級生が・・・に勤めている、親戚に・・・の資格を持っている人がいる、そしてこのリストのずっと末尾のほうに、ぼくは広島県人でカープファンなんだ、カープはどうやら今年は優勝しそうだね（だからぼくも偉いんだ）、とくるわけだ。しかしそれとてカープでプレーする選手は広島県外の出身者がほとんどで、カープが優勝したからといって広島県人の価値が少しでも上がるわけではない。ましてやカープが優勝したとして、選手の給料はうんと上がっても、ぼくらがラジオやテレビにくぎづけになりながら応援したからといってそれでぼくらの給料が少しでも上がるわけでもない。次に、選手たちはトレードによりチームを移るので、前年までは憎らしいと思っていた選手がカープに移籍してくると一変して応援し始めるし、逆に前年まで応援していた選手も

他のチームに移れば次第に応援しなくなる。これは何か不合理で健全なる精神と調和しがたい。ぼくはだから「カープファンはやめたよ」と公言し続けた。しかしどうしたことだ、東京から去ってはるばる沖縄の離島に来て、その離島のまた離島に渡ろうとする船上で、シンシナティ・レッヅの赤ヘルをかぶったぼくはテレビを見ながら広島カープをあきらかに応援している。しかもぼくはテレビに映っている赤ヘルとぼくのかぶっている赤ヘルが同じであることを船室内の人たちが気づいてくれればとまで願っているではないか。ぼくは何という小人間なのだ！せっかくこんな遠くまで来て、しばらくは野球のことなど忘れていたのに、これはまるで、雲に乗ってはるか彼方の地に飛び去って、もうここまで来れば安心だとホッとした孫悟空が、その行く手に立ちはだかる巨大な釈迦の手の指を見て自分の小ささを思い知った、という図ではないか。

船中で食べたにぎり寿司セットはとても旨かった。全国チェーンのスーパーで買った寿司が旨いのはやはり離島ならではだろう。船は高速艇で、９キロ余りの海路を２０分くらいで伊良部島に着いてしまった。ぼくはもっとゆっくりできて、一眠りできるものと思っていたが、青リンゴジュースを飲みほす頃には船は速度を緩めた。博士は喫煙船室で隣にいたおばさんと話がはずみ、すでに上陸を前にして伊良部島の要所の聞き込みはすんでいた。宮古島には観光客がたくさん訪れるようになったが、なかなか伊良部島まで足をのばす人はいないので、ここの島民は外からの人を心から歓迎するのだそうだ。上陸してすぐ目についたのは港湾ビルに掛けられた「架橋早期実現！」と書かれた垂れ幕だった。孤高を選ぶか、それを捨てて他の島との同化を選ぶか、このさいはての離島もその選択を迫られ、ついに決定が下されたのだ。「すべての道はローマに通ずる」、この大予言は着々と成就しつつある。

ぼくらは急な坂道を上りスーパーマーケットに寄ってその日の夕食の材料を仕入れた。そのスーパーマーケットの入口の横の大きな透明ガラスに、バーゲンの広告に並んで「祝完走！〇〇××君！」「おめでとう、伊良部島の鉄人〇〇××君」と書かれた大きな紙が貼ってあった。聞くところによると、この鉄人君は島の魚市場に働く青年で、レースのあとに友となった数人のトライアスリートたちを島に招いて案内し新鮮な魚で彼らをもてなしたという。ぼくは思った。何年かのちに９キロの橋が架けられるときまでこの鉄人君は現役で活躍を続けることができるであろうか。もしできるなら、それこそその橋は彼の栄光を讃えるための凱旋門ならぬ凱旋橋となろう。レースののち彼は友を従え、自転車で島に帰ってくる。島の人々は彼らを英雄として迎える。しかし彼はこの橋を渡り切ったところで引退を決意する。今まで彼が何度レースに参加して完走しても行き着くことのできなかった未踏のゴールに彼はついに到達したのだから。このようなことを思っていると、川上博士と石塚助手が買い物をすませて出てきた。

ぼくらは、坂を再び下って、港に戻り、海岸沿いに進んで渡口の浜を目指したが、途中魚市場に寄った。ここでは珍しい魚をいろいろ見た。大きなシイラがあり、熱帯魚も混じっていた。中でもぼくの興味をひいたのは、尾ヒレの付け根あたりに前方に伸びる鉤状の刺を左右に一対持った皿に載るくらいの大きさのカラフルな魚だ。これはすれ違いざまに相手をぐさりと傷つけるの

で魚の間では嫌がられている種類だろう。こいつらが集団で襲ってきたら鮫もかなわないだろう。ぼくらは鮮魚の料理に自信がないので、何も買わないでここを去った。

博士は相変わらず元気で飛ばす。それに比べぼくと石塚助手は一周遅れの選手たちのようにパワーがなくなっていた。

渡口の浜は強い風を受けており、砂浜に打ち寄せる波も高かった。翌朝ここでも泳いでみたが、波が荒いために舞い上がった砂で海中が不透明になっており熱帯魚は一匹もお目にかかれなかった。海を見晴らす展望台がありそこにシャワー設備もあった。普通ならぼくらはこの展望台の二階のフロアでテントを張るところだったろうが、あまりに風が強く、しかも展望台は吹き晒しであったのでそこはやめた。ぼくらは展望台が風よけになっていて比較的風の弱まるアダン樹の林の中にテントを張った。大きなヤドカリが歩き回っている。蚊も多い。ぼくは長袖のスポーツシャツを着、レインパンツをはいて蚊を防いだ。博士は近くにスーパーマーケットがあるのを聞きつけてさっそく蚊取り線香とアルコール類を買いに行った。

三人はテントの近くに炭を炊いて夕食の用意をした。ごはんが炊けると酒を飲むのを中断して食事が始まる。たらふく食べる。酒もたくさん残っている。話もはずむ。しかし酒席に足りないものがある。どうしたことか歌が出てこないのだ。博士は歌が好きなのだが、ぼくが彼と同行した北海道旅行の時の旅行記で彼の歌を茶化してしまったので、今回は躊躇してしまったのだろうか。ぼくはカラオケ用のテープを一本持ってきていてひまさえあれば練習するつもりだった。特にいつもぼくの心をしめつける "Beyond the Reef"を繰り返し歌うつもりだった。しかし体調をくずしていたぼくは気の抜けたビールのようだった。石塚助手は少なくとも「瀬戸の花嫁」が歌えることは実証済だ。しかし彼はいつものようにおとなしく静かに酒を飲んでいる。だれも歌おうとしない。ぼくらは火を囲んで、他愛のないことを話しただけで、酒が空しく体内を流れる。話も途切れがちになりやがて絶え間ない波の打ち寄せる音だけが聞こえる。ホタルが舞う。学生時代のあの乱痴気騒ぎはもうぼくらにはできなくなってしまったのか。カラオケ文化がぼくらをかえっておとなしくさせてしまったのだろうか。あのハイテクの装置がないと我々はもやは歌うことができなくなったのか。マイクを持たなければぼくらはもはや歌わないのか。歌おう、大声で。さもなければぼくらのこの旅の思い出はやがて降り積もる、時の片の堆積の下に深く埋もれて探り出せなくなる。思い出の化石と化してしまう。思い出を生き続けさせるのは歌だ。音楽だ。それぞれの思い出にまつわる音楽のメロディーを口ずさむことによってはじめて我々はその思い出の臨場感を蘇らせることができる。音楽による条件反射だ。ＢＧＭの伴わない思い出は事象として記憶されるだけでその時の心情を再生することは難しい。なぜなら人の心情は動的なものであるから、やはり音楽のような動的な媒体の上にのみ固定し保存しうるのだ。ある感情を静的媒体である文章で記録しても、その後にそれを読み返したとき同じ感情がよみがえるであろうか。感情は心臓の鼓動のように時間の関数として起伏する。音も時間の関数としてオシロスコープにカーブを描く。さすれば時間の関数はすべて時間を共通パラメターとして互いに一対一対応させる

ことが可能ではないか。博士よ、助手君よ、ぼくらは歌を忘れていた！

４月３０日

ぼくは今、伊良部島と下地島の載った国土地理院の２万５千分の一地図を目の前に開いている。旅行から帰ってしばらくして買ったものだ。なぜもう二度と行くこともなかろう所の地図を買ったのか、その理由はこうだ。

今回の旅行中に走った道で一番印象に残ったのはどれかと問われると、ぼくは迷わず４月３０日に走った伊良部島と下地島を分ける細い水路に沿って延びる伊良部島側の道だと答える。その水路の幅は小さな川のそれであるが、上流も下流も海に通じているから川ではない。そして川でないから両岸がすなおに平行するのではなく対岸とは無関係に複雑に凹凸しているのだ（http://www.ritou.com/miyako/irabu.shtml参照）。

その日、朝から降り出した雨が上がったのち昼食を済ませるとぼくらは乗瀬橋を渡って隣の下地島に入り、長い飛行場を有して巨大な空母のようなこの小島を一周した。乗瀬橋に戻ると、こんどは伊良部島側に戻り水路に沿って北上した。左右に展開する趣のある小さな湖や入江を見ながら、こんな珍しい風景は見たことがない、ここは間違いなく国立公園の格調があるぞ、などと独りごちながら進んでいると、ずっと先に行っていた博士が自転車を止めて「おかしいな」と首を傾げてぼくらの来るのを待っていた。そしてそこは見覚えのある「サシバの里」という施設の前だった。ぼくらはいつのまにかすでにその朝一周した下地島に再度渡ってしまっていたのである。前述の水路はすんなりと延びるものでなくくねくねしていて、ぼくらの走った道路は両側に小さな入江や湖がいくつもあるという状態だから橋をいくつか通ることになり、そのうちに下地島に渡る橋をうっかり渡ってしまったらしかった。ぼくらは狐につままれたような心持ちになり、この人だましの景色を怪しんだ。こうしてぼくはますますこの道が気に入り、このぼくらを迷わせた地形に興味を持った。そしてこの地形がどのようにぼくらを迷わせたのかを解明するためにぼくはその地図を買ったのだ。ところで「サシバの里」のサシバとはこの地に飛来する鷹の一種である。

さて読者諸氏はこの国土地理院の２万５千分の一地図を見るならすぐにぼくらのたどった道筋がお判りになるでしょう。そしてさらに地図読解力に長けた方ならぼくらがその道をたどるにつれ左右に展開したたぐいまれな素晴らしい光景をある程度想起していただけることでしょう。しかしどんなに地図読解力に恵まれた才能を有し且つ想像力に長けた方も、地図を見ながらぼくらと同じようにこの道すがらこの地形のラビリンスに惑わされ自分の現在位置をあらぬ所に錯覚し戸惑うことはよもやないでしょう。しからばそれはこの地形の魅力の肝要なるものを逸したことになる。

ここは天然の迷路で、しかもたくさんやたらな方向に枝分かれして延びる幾多の別れ道を有す今はやりの人工的で狭苦しい迷路とはまったく違って、道は二度か三度分岐するだけで、ぼくらを惑わすのは周りに展開する精巧に仕組まれた魅惑的風景だけなのだ。ぼくらを迷わせるのは多くの選択肢ではなく、海を川に見せたり池に思わせたりする擬態なのだ。迷路ファンならずとも一度はチャレンジしてみる価値のある名路だ。日本には日本百名山とか、名水百選とかいうのがあるが、日本百名路というのが提案されるなら、ぼくは真先にこの伊良部島の道を推薦したい。

さて、ぼくらはすでに下地島を一周していたから一度訪れていたサシバの里で錯覚に気づいたが、もし下地島を先に訪れていなかったらどうだろう。もしかしたらぼくらはいつまでも伊良部島側にいるものと思い込み、その錯覚が連鎖的に新たな錯覚を呼びみるみるこの美しき迷路に深く吸い込まれてゆき（そういう時は、正確な地図はかえって錯覚を手助けするものだ）、ついにぼくらはツアーサイクリストにとっての夢また夢のゴールである桃花源郷にさまよい入ることを果たせたかも知れない。生きている間に桃花源郷を知ることを許される者は幸いかな。およそ人が迷路にひかれるのは、その彼方にあり幸い住むと人の言うこの未知の里ユートピアに無意識のうちに心をそそられているからである。サシバの里はその迷路の迷惑な出口であった。覚めて絶望と苦渋の旅を続けるより、いっそ迷路の終身刑の虜となり、いつかエデンの楽園にたどり着けるという甘い思いに浸りながらその中で果てるほうが幸せである。迷路、あるいはそれはユートピアの同義語ではなかろうか。かの人に愛されているとひたすら迷信する恋する者の甘い恍惚はオリンポスの神々の至高の法悦に少しでも劣るものであろうか。

さて、話を朝に戻そう。その朝も博士が一番に起きて木炭を起こして紅茶をいれる。そして助手の石塚君が起きだしてきて夜通し干していた物が乾いたかを確かめる。たいてい夜露と朝露で湿ったままだ。そしていつまでもまとわりつこうとする朝夢の愛撫をついに振りほどいてぼくがテントから顔を出す。

質素な朝食が作られ公平に分けられる。各人一つのティーバッグで食前と食後の二回分の紅茶を作る。波の音が今朝も荒々しい。しかし食後いつものようにぼくは泳いでみることにした。渡口の浜はあいかわらず波が高く水が濁っていた。見ると標識があり、それによるとここは遊泳禁止場所だった。やはりほとんどいつもここは波が荒いのであろう。そんな所にシャワー施設があるのもおかしい。防波堤の上で仰向けになって寝ている人がいた。その幅はやっと一人が長さ方向に沿って横になれる位のものだった。ぼくは入江に浮かぶ小さな島に泳いで渡ってみることにした。泳ぎつくと、島の岸辺は岩肌の多い所で、サンダルを渡口の浜においてきたので歩くと足の裏が痛い。もっと先まで行ってみたかったが足が痛くて億劫になり引き返した。何のみやげ話もなくぼくは浜に戻りシャワーを浴びに展望台に行った。すると先ほど防波堤の上で寝ていた人がすでにシャワーを浴びて出てくるところだった。二日酔いで昨夜からあそこで寝ていたそうだ。よくあの細い堤から落ちなかったものだと感心した。

ところで彼の話だとかつては宮古島にも銭湯があったが１０年くらい前に休業して以来この辺りには風呂屋はなくなったとのことだった。この地では暑さが酷しいのでわざわざ金を出してまで熱い風呂に入るより冷たいシャワーで十分なのだろう。

やがて、博士と助手が食器を持ってきて洗い場で洗い始めたので、ぼくもそれに加わった。すでにゴミはかたずけられていた。そうこうしているうちに雨が降りだしたのでぼくらは各々テントの中に避難しそれぞれの孤独な時間を昼頃まで過ごした。博士と助手は低くなった所にテントを張っていたので、底から水が浸入してきたそうでかなり居心地の悪い時間を過ごしたようだった。一方ぼくは少し盛り上がった所を選んでいたので安泰で、フライシートも功を奏し快適な時間を過ごすことができた。

ぼくは雨が降ってもテントの中で豪華ホテルの高価な一室にいるよりもリッチな時間を過ごすことができる。それはひとえに自然という最高級ホテルのおかげである。自然ホテルにいればじかに接することのできる環境の特殊性でいつもその地方にいることをさまざまに自覚させてくれるが、一般ホテルはそこが例えば北海道であっても入口を入った途端に東京、名古屋、福岡、あるいは他のどの町にあるホテルとも同じ画一化されたスタンダードの空間が広がる。せっかく北海道にいても北海道から隔離された空間にいるのだ。これではとても旅の宿とは言えない。ビジネスの宿である。一般ホテルのナイトライフは部屋の電気を消して窓から街の夜景を眺めながらちびちび酒を飲む楽しみがある。しかし、ツーリングサイクリストの夜景は真上にある。我ら自然ホテル愛好家の楽しみ、夜の醍醐味は何といっても地球をすっぽり包む巨大プラネタリウムである。いつまで見ていても星座はぼくらを飽きさせない。

さらに自然ホテルの空調設備はすべて季節に合わせて調整されているので四季の気候をそのまま楽しませてくれる。春は春眠暁を覚えずのとおり温かい午後のそよ風が甘い眠りに誘い、夏は蒸し暑くてせせらぎで冷やしたビールがよけいおいしくなり、裸になると皮膚が強まり冷房病などは一切知らず、秋は天高く馬肥ゆるのとおりひんやりし始めた空気が食欲を増進する。テントの外には紅と黄の落葉の絨毯が広がり、あちこちに木の実がなり、いよいよ自然ホテルが冬眠する宿泊客たちのために慌ただしく部屋と食糧を準備しはじめた様子を見ることができる。冬の到来とともに自然ホテルの支配人はすべての宿泊希望者に余すところなく部屋を提供し、宿泊客たちを寒さから守る。冬にこのホテルに泊まったことのあるものなら、寒さの中で初めて身体の奥に灯る小さな炎のあのほのかな暖かさの幸せを忘れえぬであろう。

さてぼくは、この雨の一時、仕事をする気分にならなかったので読書をすることにした。大抵はポケットサイズの英訳新約聖書を持参するのであるが、今回持参したのは古典中の古典、ホメロスの「オデュッセイ」だ。それは、ギリシャの英雄オデュッセウスのトロイ戦争からの帰国談で、島々を巡りながら奇想天外な冒険を経てようやく故郷イタカの島に帰り、さらに自分の妻に群がる不埒な求婚者たちを討ち滅ぼすというもので、島々を巡る今回の旅の友としてはぴったりし

たものだった。否、ホメロスのもう一つの傑作「イリアス」とともにこれはぼくの人生の旅の大切な伴侶である。ぼくは一度読み終えた英訳版を最初の三十数葉ほど切り取り持参し、読み終えた紙から一枚一枚炭を起こすための燃料として再利用した。しかり、オデュッセイは、ぼくのひるみがちな心に冒険と不屈の精神を注入し続けただけでなく、その一葉一葉は燃え上がりながら炭を着火しその火勢を強め、もってぼくらの冷えがちな胃に温かみを与え続けた。ぼく自身島々を訪ねながら、自らがオデュッセウスとなったつもりで今エーゲ海の孤島にたどり着いたのだという振りをして波打ち際を歩いたりした。

雨が止むと、ぼくは近くのスーパーマーケットに行き三人分の昼食のための食糧を買ってきた。「飲むためのお米」という珍しい缶入りの飲み物も三個買った。飲むとおもゆを甘くしたようなものでなかなか旨かった。それでその後もぼくは水分とエネルギー源として何本か自動販売機で買って飲んだ。自動販売機で思い出したが、本土ではとうに当たり前のこととして受け入れられている消費税がこの島ではまだ一般に受け入れられていないのだ。自動販売機の缶入りソフトドリンクもまだ１００円のままだった。おそらく宮古の人たちは悪税に苦しんだ歴史を持っているせいで、いかなる名によるものであっても新しい税の導入に対し強いアレルギー反応を起こすようになっており、消費税も断固受け付けようとしなかったのだろう。

さて、前述したように昼食後ぼくらは隣の下地島に渡り、サシバの里を経て下地空港に着いた。ジャンボ機も離着陸できる立派な滑走路を有しているが、ここの便は那覇へ一日一往復があるのみだ。実はこの空港の主な目的はパイロットの訓練にある。したがってパイロットの卵たちはここで雛になり、飛ぶ練習を繰り返し、ついに巣立ち、世界の空に飛び立ってゆく。まさしくサシバの里なのである。

ぼくらは、小さな空港ビルに入ると搭乗カウンターの女子従業員ふたりを相手にひとしきり会話を楽しんだ。今は連休のせいですべて満席状態ということだった。博士は那覇に行きたそうだった。やがて、エンジンの音が聞こえてきたので、那覇行きの始発便かつ最終便であるジェット機の離陸を見とどけた。空港ビルから出ると、島のお巡りさんがいて、この島では交通量が少ないせいで十字路をスピードを緩めないで通りすぎる車が多いから気をつけるようにとのアドバイスをもらった。さらに、今夜のキャンプサイトとして適当な所も教えてもらった。

下地島の北の海岸は伊良部島の北部とともに湾を形成しており、この浅い湾にはたくさんの巨岩が散らばっていて、初めて見る者には異様な光景である。なんだか地の果てに来たかのような気さえしてくる。ここは今でも、伝統漁の「仕掛け魚垣（ながき）」が行われており、滑走路に沿って水際を走っていると浅瀬にそのための石垣が見られる。滑走路の突端をなぞって走っているときにぼくのマウンテンバイクはまたパンクしてしまった。博士のアドバイスで、ぼくはヘルメットの頂部の穴をガムテープで閉じ、これに水を満たし、パンクの穴を探した。博士はヘルメットを動かないよう両手で支えくれ、ぼくはふくらませたチューブを水の中でしごく。そして石塚

君はぼくらのこの模様を横から写真に収めた。パンクは容易に直せたが、バルブの部分が老朽化しており空気がまともに入ってゆかない。幸い博士が虫ゴムなどの補修材を持っていたのでぼくは窮地を免れることができた。この博士は他にはブレーキ・シュー、スペアタイヤ、すでに述べたガムテープ、紅茶バッグ一箱、火傷薬、国土地理院の地図、調味料一式等、きめ細かい装備を得意としており、とても今回がキャンピング・ツアー二度目とは思えない用意周到なサイクリストだ。

さて、下地島を一周して、乗瀬橋にもどり最初に述べたような華麗なる迷路を経て北上し伊良部島の佐和田の浜の近くにあるマリーン・センターという総合スポーツ施設に着いた。先ほどのお巡りさんに勧められた所で、彼によるとここには湯の出るシャワー設備があるはずだ。こんな離島にもあったのかというような立派な観客スタンド付きの野球場や、体育館等のあるこの運動公園の一隅に自転車を止めた。６・７人の白い半袖の夏制服を着た女生徒たちがブランコや滑り台で遊んでいた。（博士の観察によると、たばこを吸っていた者がいたらしく、不良少女だということだ。しかしたばこなら博士もよく吸う。）

風が強いので、野球場の中にテントを張ろうということになった。博士の提案でダッグアウトの中が選ばれた。地面よりも低くなっているから雨が降ったら水浸しになるのではないかというぼくの危惧は、中に排水ガターが整備されていたので無用の心配とわかった。さらに水道設備もあることがわかり、ぼくらはさっそくテント設営にかかった。もちろんぼくらは慣習に従って、ビジター側のダッグアウトに幕を構えた。

ぼくは後ろのタイヤがまた平たくなってきていたので、公園でタイヤを外し空気を抜きヘルメットに水を満たしてチューブのパンク箇所の点検をした。どこからも空気は漏れていなかった。しかしポンプで空気を入れると抜けるのだ。博士と助手は近くのストアに買い出しに行った。ひとりになったぼくはなおもパンクの穴を探していた。すると白い運動靴が目の前に近づいてきて「おじさん、パンク？」と聞いた。「そう」と言って、その運動靴から延びるひょろ長い脚、紺のプリーツスカート、白いブラウス、と見上げてゆくと風にそよぐ髪の毛で顔を半分覆われているが気品のある顔だちの女生徒が立っている。かわいい前歯が自然に下唇を軽く噛んでおり, 薄く開けた目でぼくを見おろしている。すぐにあと３人ばかりが集まってきてぼくのまわりにすわると口々に自転車やぼくのことを聞き始めた。やがてぼくが中学生かと聞くと、みな笑って高校２年生だと言った。ひとりは大柄で胸元のボタンをひとつふたつよけいに外していて胸の膨らみをかなり露出させて挑発的である。一見番長タイプだ。ひときわ小柄で髪を短く切ってボーイッシュに可愛い「おちびさん」（あとで博士が命名）もいたが、その子の言葉づかいは他の三人に少しもひけをとらずこれも気骨のある少女だった。４人目はこの地方特有の南国的エキゾチックな美しさ持つ背の高い少女だ。しかし４人のなかで最も印象的なのはやはり最初に声を掛けてきた気品のある少女だ。内に大きな自信を秘めているような落ち着きがうかがえる。

オディッセウスは異国に泳ぎ着いて身も心も疲労困憊していたとき、川口に洗濯に来てボール遊びをする少女たちの一群を見つけ、身を投げ出して助けを求めるが、その時他の少女たちは怖がって蜘蛛の子を散らすように逃げたのにナウシカだけは堂々とオディッセウスに直面し、話を聞く。髭をのばし、妙ないでたちをし、パンクの修理で汗だくになっていたぼくの前にやってきて話しかけたこの気高い島の美少女をナウシカと呼ぶことにした。

「きょう下地島を走っていたでしょう」「私たちは車に乗っていて見たよ」「手を振ってあげたよ」「気がつかなかった？」彼女らは口々に言った。ぼくはパンクの穴を探す操作をまだ続けてはいたが、これだけの少女に囲まれて気もそぞろになってしまっていて、穴の位置を示す泡が見えてもそれに気づけなかったろう。

「そういえばそんなこともあった。君らが乗っていたのか。だれが運転していたの？」ぼく。
「先輩が宮古島から車で来たんで、乗せてもらってたんよ」おちびさん。
「このへんにシャワー浴びられるところある？」ぼく。
「あるよ、あの体育館の中に温水シャワーがあるから行ってくれば」番長。
「でも、きょうは閉まっていて入れないよ」エキゾチックさん。
「いつもだったらあいてるのにねえ」番長
「きょうはどこに泊まるの？」おちびさん。
「ここでテントを張って寝るよ。夕食もここで自炊するよ」ぼく。
「わー、夜になったらまた来てみようか」口々。
「でもここは夜はこわいよ、出るよ」番長。
「出る？そういえば、宮古島のインギャーという所でこわいことがあったよ。夜テントで寝ていると急にオギャー、オギャーという叫び声を聞いたよ」ぼく。
「ああ、あそこはずっと前に赤ちゃんが捨てられたことがあるから、きっとそれだよ、ね」おちびさん。
「でも、大人の男性の物凄い声だったよ」ぼく。
「それは、赤ちゃんが育ったんだ」番長。
「ハハハッハ」みんな。
「おじさん、どこから来たの？」ナウシカ。
「東京から。直行便で宮古空港に飛行機で・・・」ぼく。
「わー、すごい」口々。
「東京一度行ってみたい」エキゾチックさん。
「でも、東京で暮らしたいとは思わないよね。おじさん、東京で何してるの？」番長。
「サラリーマンだよ」ぼく。
「私はお姉さんが名古屋にいるから、就職は名古屋でする」おちびさん。
「私は大阪で看護婦になるよ」ナウシカ。
「看護婦は大変な仕事だけど、君のようなしっかりした子なら大丈夫だ。ぜひ、看護婦になって

欲しいね」ぼく。「（傍白）もし、ぼくが病気でもして入院するなら君のような看護婦さんにめぐり合いたいものだ。」

このようなことを話しているとタクシーが来た。おちびさんが「こっち！」と言って手を振った。彼女は家が島の反対側で、ここから丘を越えて歩いて帰っていると日が暮れるので電話でタクシーを呼んでいたのだった。「早く来たね」と言って立ち上がると、「でもどうしよう、私お金持ってないよ」と心配そうに言った。ぼくは黙っていた。「（傍白）おちびさん、このおじさんはその手にひっかかるような甘ちゃんじゃないよ。」彼女は「じゃあまたね、バイバーイ」と言って、はずむようにかけて行った。しばらくするとまたタクシーがやって来て公園のそばに止まり、警笛を鳴らした。実はこれがおちびさんが呼んだ車だった。「遅いからもう行ったよ！」番長たちは同級生の男子にでも言ってるようにぶっきらぼうに言った。タクシーは来た道を引き返して行った。

やがて博士と助手が買い物から帰って来た。日が暮れかけている。パンクの修理の見込みがたたないぼくは彼女らに、近くに自転車屋はないかと聞くと、あるよと言ってナウシカが自転車で案内してくれることになった。そこでぼくは博士の自転車を借り、片手でハンドルを握り、片手でパンクしたタイヤを持って行くことにした。ホメロスのナウシカは、悪い噂の流れることを嫌ってオディッセウスに自分よりずっとあとからついてくるように指示したが、ぼくのナウシカはそのようなことを気にしないでぼくと並んで走った。民家には明かりが灯り始めていた。ぼくはナウシカと他愛のないことを話しながら５・６分のサイクリングを楽しんだ。

自転車屋に着くとナウシカはそこの女将さんと話を交わす。「どこの家の娘さん？・・・ああ、あそこの子・・・きれいやは・・・」そのような話し声を聞きながら、ぼくはエア・コンプレッサーでタイヤに空気を入れてみた。やはり空気が抜けるので修理を頼むことにした。翌朝取りにくると言ってタイヤを預けると、再びナウシカと公園の方に引き返した。複雑な道筋でひとりで戻るのは難しかったからだ。途中でエキゾチックさんが歩いて帰宅しているのにすれちがった。うつむきかげんで歩いていたがぼくらが来るのを見つけるとぱっと明るい顔になって手を振った。公園に着くと番長ももう帰ったあとだった。ぼくはナウシカに感謝し、気をつけて帰るよう言って、来た道を帰らせた。たそがれの中を自転車のペダルをこいで去ってゆく彼女の後ろ姿をいつまでも見ていると、沈みゆく夕陽を後ろから浴びてオレンジ色に輝くナウシカの両足が映画のラストシーンの「終」の字のような印象で浮かび上がってきた。

「大神島」につづく　http://p.booklog.jp/book/75896/read

写真(photos):
amazon.com/author/nagamitz-kazuhiro